

昭和 49 年一年間における当院の交通外傷患者は 799 名 (内死亡 17 名) である。内 20 例について糖質代謝の変動をみるために、血糖値、尿 17-OHCS、血清トランスアミナーゼの経日的変化をみた。血糖値は受傷日高値を示し、最重症例ほど高値であった。尿 17-OHCS も同様に高値を示した。これは糖代謝において内分泌活動の関与が大なることを示している。またトランスアミナーゼは受傷中間期に軽度上昇していた。

### 29. 当院における膵胆道系手術症例の統計的観察

相馬光弘, 小沢智哉, 日浦利明,  
田畑陽一郎 (船橋中央)

当院における昭和 44 年 1 月より昭和 48 年 9 月までの膵胆道系手術総数は 217 例である。うち良性疾患 196 例, 悪性疾患 21 例, 悪性疾患の根治手術 4 例である。当院においては術中胆道鏡, 術中逆行性胆道造影を施行し, 遺残結石なきよう努めている。しかし胆摘のみの症例に比して, 総胆管ドレナージ施行症例の術直後の血清アミラーゼ平均値は高値であるため, 膵臓に対しては十分な庇護が必要である。

### 30. 成人腸重積症を惹起せる回腸カルチノイドの 1 例

向井 稔, 田 紀克, 齋藤登喜男,  
藤代国夫 (成東病院)

症例は 48 才の男子。主訴は回盲部痛。虫垂膿瘍の診断のもとに夜間, 緊急手術を施行。手術所見は回腸回腸型の腸重積症で, 回腸末端より約 54 cm の部位に拇指頭大の腫瘍を認めた。腫瘍を中心に約 10 cm の回腸切除術を施行し, 端々吻合を行なった。肉眼所見は, 大きさ 1.5×1.5 cm の表面平滑な無茎性ポリープで, 病理組織所見は充実性胞巣状構造を呈し, 一部筋層内に浸潤している回腸カルチノイドであった。尿中 5-HIAA も 14.7 mg/day と上昇していた。本症例に多少の文献的考察を加えて報告した。

### 31. 回盲部潰瘍を来した Behçet 病の 1 例

武藤護彦, 塩田彰郎, 浜野頼隆 (塩谷病院)

症例は 34 才の男性, 会社員。主訴は右下腹部痛, 発熱。昭和 38 年, 虫垂切除術施行。その後口内炎, 発熱を繰返し, 昭和 47 年, 会陰部潰瘍出現。昭和 48 年, 主訴をもって当科へ来院。入院時検査では白血球数 14000, 検便にて潜血 (+), CRP (卅), 血沈促進, 虹彩炎の瘢痕あり, 注腸造影にて回盲部潰瘍認め, 回盲部切除術施行, 穿通性潰瘍を認めた。術後経過は良好にて退院するも, その後の検査および病歴より, Behçet 病と診断し

た症例である。

### 32. 先天性胆嚢欠損症の 1 例

村上光右, 横山健郎 (国立佐倉療養所)  
神津照雄 (千大)

49 才男性。主訴右上腹部仙痛。家族歴, 既往歴に異常なし。貧血, 発熱, 黄疸(-), 悪心, 嘔吐(+), 腹壁緊張あり右季肋部圧痛(+). 血液, 肝, 心, 腎, 肺機能正常。DIC で胆嚢造影されず。B-胆汁欠如。EPCG で膵管軽度拡張。昭和 48 年 9 月 25 日胆石症の診断の下に上腹部正中切開。肝円, 肝鎌状靭帯は深く大きく緊張, 胆嚢なし。総胆管に拡張, 壁肥厚, 結石(-)。本症と診断し試験開腹とす。術後時々尿中アミラーゼが高値を示し, 慢性膵炎の像を呈するも愁訴はとれ順調に経過す。

### 33. 膵全域にわたる多発性膵石症の 1 例

飲野正敏, 谷口恒郎, 小林健次 (谷口病院)

症例は 61 才の男性。6 年前より上腹部痛, 飲酒少々。上腹部正中にくるみ大腫瘍を触知。腹部単純撮影にて, 膵臓の部位に一致して, 大小多数の結石陰影を認めた。血液一般, 肝機能は正常。空腹時血糖 94 mg/dl。精負荷試験では糖尿病型を示した。多発性膵石症の診断のもとに昭和 48 年 5 月 21 日, 膵管空腸側々吻合術を施行。その際空腸内瘻を設置。摘出結石は大小 20 数個の黄色く硬い結石であった。7 カ月後の現在, 術後良好である。

### 34. 中心静脈栄養経験例の報告

大森耕一郎, 二宮 一, 小野田昌一,  
曾野文豊, 岡田 正 (県立佐原)

われわれは, 11 例に中心静脈栄養を施行したのでここに報告した。症例の内訳は, 適応別で術後縫合不全 2, 腸閉塞 2, 胃出血 3, 食道癌 2, 熱傷 1, 腹膜炎 1 である。

中心静脈カテーテルは, 経皮的に上腕静脈ないし頸静脈より挿入し, 糖を 1 日 300~400 g, アミノ酸を 70~100 g 投与し, 脂肪はイントラリピッドを肝機能が悪くなければ使用した。

### 35. 若年者胃癌の 6 年生存例

小林弘忠, 石崎省吾, 大和田操,  
坂田早苗 (宇都宮外科)

昭和 38 年より 48 年の間に, 若年者胃癌 6 年生存例を 2 例, 病理診断不明であるが 10 年生存例を 1 例経験したので報告する。症例 1 17 才男, 42 年 3 月手術す。Carcinoma simplex mucocellulare (II, 3,  $\gamma$ ), pm